

初期瑞巖寺史の研究

著者	木村 俊彦
雑誌名	論集
巻	41
ページ	1-9
発行年	2014-12-31
URL	http://hdl.handle.net/10097/00130331

初期瑞巖寺史の研究

木村 俊彦

はじめに

松島の「青龍山瑞巖圓福禪寺」は虎哉宗乙が北山の覺範寺開山のまま、大壇越・伊達政宗の依頼するままに命名したものである。米沢時代から虎哉が政宗の師傳の如き存在であったことは、木村『虎哉録―斑寅集―』（木耳社、2003）の解題で述べた。天台宗時代は松島山延福寺であったが、鎌倉期の臨濟宗時代（建長寺は創建中）の開山・法心（虎哉は方丈の松島記で「法身」とし、瑞巖寺ではこれに従う）性西当時の記録もこの「延福寺」であるばかりか、後で論ずるように妙心寺派開山の實堂宗中関係の記録も同様である。

「圓福寺」と記されるようになったのは江戸時代の正元師蠻などの記述であり、要するに虎哉和尚の命名した「瑞巖寺」が法嗣・陽巖、法弟・海晏の二代に受け継がれ、江戸時代に定着したのである。本稿は、彼らに先立つ妙心寺派瑞巖寺の開山・實堂宗中について余り知られていないので、松田紹典師の研究に引き続いて論ずるものである。二代目・石門宗硬はその法嗣だが、師の跡を継いで一ノ関（現・奥州市水沢区）の大安寺住持となり、その後盛岡の聖壽寺の中興開山になった（「大安寺過去牒」）。

實堂和尚の出自

實堂宗中は故・松田紹典師が『正法』創刊号（昭和五十六年）に「戦国末期の本派の教線と瑞巖寺」と題して研究された。この雑誌は加藤隆芳老師の援助と教学部の公認のもとに五巻まで続き、老師遷化と共に終わった。それによると、栃木県那須

の雲巖寺の大蟲和尚の語録に、「奥陽延福堂上老和尚」への返奉の詩が掲載されている。天正六年(1578)に、二十年の親交ある陸奥・延福寺の實堂和尚から詩の贈呈があり、これの返詩だという。妙心寺派の歴史が時の地域の権力者と関連して述べられる通例に従えば、留守氏が重要である。瑞巖寺が位置する陸奥国宮城郡の領主・留守(伊澤) 顕宗は伊達家から養子・政景を迎えた(永祿十年1567)。

大安寺さんから頂いたパンフレットに依れば、元来、伊澤氏は信州石和郷の出身(イシワ↓イサワ)で、鎌倉時代初期に幕府の奥州留守職という意味で「留守」氏を名乗った。この留守職は藤原泰衡の遺臣が反乱した時に前奥州留守職を解任した後、九条家の宮侍だった伊澤家景を北条時政が鎌倉幕府に推薦して、多賀城の留守職に補したものと(『角川日本地名大辞典』宮城県332頁)。この伊澤家は松島山延福寺の保護もした領主で重要である。職名を姓氏にした例は太宰府の太宰少貳(平安時代の権ノ帥)から「少貳」氏を名乗った藤原秀郷の末裔が挙げられる。こちらは宗峯和尚を崇福寺に拝請した。實堂和尚の系譜を松田紹典師の前掲論文に拠って述べると、實堂宗中は東海派下玉浦の系統を引き、美濃の清泰寺を開いた大圭に允可された。その師・景聰が開いた大智寺に一時住職する。大圭の師・景聰の語録の大圭注解が清泰寺に残っている。一ノ関の大安寺は實堂が延福寺を退山して開山となったが、留守氏は十七世紀に水沢伊達氏となり、大安寺と共に水沢に移った。大安寺は留守宗利の開基に成り、先父・政景の菩提を弔う菩提寺である。その大安寺さんの過去牒にこの間の事情が書いてあり、コピーを住持の奥村宗侃師から頂いた。次の通りである。實堂和尚を「前圓福」としているのに注意されたい。

「六月慶長十五庚戌(1610)、大安開山故大智前圓福實堂和尚美濃上有知之清泰寺開山大圭和尚法嗣。諱宗中。転位而前住美濃國大智寺。其後住松島圓福寺、爾來開創于當山也。」

松田紹典師に依ると、實堂は慶長十三年(1608)、七十六歳で大安寺の開山として圓福寺から移住した。この年には仙台の覺範寺の虎哉和尚のもとに愚堂・大愚・雲居ら七盟衲が随侍している。『虎哉録——斑寅集』に付されている行状(あんじょう)に依れば、虎哉は永祿四年(1561)に松嶋に遊ぶ次いで、圓福寺の塔頭・圓同庵で實堂と初会し、数日を過ごした。實

堂が三十歳頃、虎哉は年譜に三十二歳とあり、この後米沢の東昌寺（南禅寺派）に寄寓した。住持・南花和尚が伊達輝宗の弟だったので、自然、伊達政宗の師傳のようになった。虎哉が最初に頼った塔頭・圓庵に實堂和尚が住していたのは、本寺が朽廃していたからで、矛盾はない。那須の雲巖寺の大蟲は美濃出身の東海派で、詩偈集に「奥陽延福堂上老和尚」への答礼とあり、この二人は美濃東海派の旧知であつた。

虎哉らが東北地方に進出した背景は美濃の別傳事件(1565)にあり、快川和尚の恵林寺移住と軌を一にする。木村編『虎哉録―斑寅集―』（木耳社）の「解題」6頁を参照されたい。大安寺さんがコピーして下さった過去牒に依れば、實堂は一ノ関の大安寺開山の翌々年、慶長十五年に没した。法嗣・石門宗硬は延福寺に続いて大安寺を後董したが、南部藩の佐竹氏に拝請されて聖壽寺の中興開山になる。その後は虎哉和尚が法嗣・陽巖をその後董に推薦した。彼は早逝したので、快川会下の法弟・海晏を越前から呼び寄せ、妙心寺派「青龍山瑞巖圓福禅寺」四世とした。虎哉は松島記では「瑞巖寺」とした。そこで、本堂に掲げてあるこの由来書を『虎哉録』から後述「資料篇」に転載するが、本堂の額は無題である。なお虎哉と實堂は初対面であつたが、美濃東海派の仲間として旧知の如くになつた

法心―蘭溪両禅師について

蘭溪は建長寺在住十三年、建仁寺在住三年後に建長寺に戻り、再び建長寺から出寺することになつて、甲斐から無準下の仲間・法心（ほつしん）の居た延福寺に来たものようである。この行跡は蘭溪の弟子・無象静照（淨智寺住職）の行状記に次の様にある。

「文永九年壬申（中略）時比叡山徒衆厭惡我宗哲盛而捧書訴之闕。於是大覺禅師寄跡於甲州、或居奥之松島。師随之作伴。」（『淨智第四世法海禅師無象和尚行状記』、『統群書類従』巻228、368頁）文永九年（1272）に大覺禅師（蘭溪）は甲州に寄り、或いは奥「州」の松島に居した。『統群書類従』第九輯上368頁

天台宗徒の迫害で鎌倉を出て文永九年（1272）に松島延福寺に来たのである。すべての史書がこの間の事情を曖昧に書いて

ているのは、随侍した無象の「行状記」を等閑に付しているからである。虎関師鍊が「大覚禪師行實」に書いていることに依れば、蘭溪道隆は寛元四年（1245）宋から太宰府に至った。『沙石集』の著者・無住はそのころ二十歳の時に、法心禪師から天台智顛の『法華玄義』を聴講したという（鈴木常光『真壁平四郎』29頁、無住『雑談集』巻三）。この著者は法心の帰国を蘭溪より二年前（滯宋一二三六一―一二四四）としている。蘭溪と同じ無準門下で、後者は「承性（性西）西堂に示す」という書簡（原漢文）を書いている（『大覚禪師語録』巻下、資料篇参照）が、松島のことはまだ書いていない。この終りに「至祝」としているが、「冗（ひん）」という親称を使い、親しい弟々に与えた一種の紹介状のようでもある。「至祝」と結んでいることから、既に延福寺に住職した（村山泰応『瑞巖寺誌』では正元元年〔259〕ことを祝ったもののようにも読める。資料篇に掲げた。無住の『沙石集』（梵舜本）に、

「奥州松嶋ノ長老法心房ハ（中略）其ノ後歸朝シテ松嶋ノ寺ニテヲコナヒケリ。サル程ニ臨終ノ事、七日有テヲハルベシト侍者ニツグル。（中略）其ノ日ニナリテ齋了ニ椅座ニ坐シテ侍者ニ辞世ノ頌ヲカカス。「来時明々。去時明々。此は何物。喝。」（鈴木常光『真壁平四郎』93、100頁から。）

虎関の『元亨釋書』と文脈はよく似ており、後者が前者から採って増補したものと見られる。無住は法心に聴講した禅僧である。蘭溪道隆は建長寺に十三年、京都の建仁寺に三年住して再度建長寺（「巨福山」の名で呼ぶ）に戻った（262）が、侍者・無象に依れば、天台宗徒に讒言されて、甲斐の国から奥州に行脚した。法心没後に宮城郡主の留守氏を頼って松島に行脚し、二世とされたものか。法心は開山後の建長五年（1253）に東福寺の圓爾に眼病の見舞いの書を送った（鈴木前掲書96-97頁）。『元亨釋書』や『沙石集』は、法心は遺偈を松島で唱えたとする。蘭溪が建長寺に戻った年にそこで没したのは弘安元年（1278）である。

蘭溪が甲斐行の後に延福寺に住したのは法心が示寂した文永十年（1213、村山前掲書22頁）の後であるから、続く具合は良い。一般にこの延福寺が法心時代から圓福寺に変わったように言われているが、松田紹典師の引用した大蟲書簡はすべて實堂和尚を「延福堂上老和尚」と呼んでいる（松田紹典前掲論文）。正元の『延寶傳燈録』は江戸時代の作であるから、既

に虎哉後で「圓福寺」としている。大安寺過去牒にも「圓福」とあるが、江戸時代初期の資料である。「瑞巖圓福禪寺」から「瑞巖寺」へと確立したのははじめに述べたように政宗—虎哉の時代からである。後掲の蘭溪書簡は後輩の紹介状のようなものになっている。「蘭溪和尚行實」に「甲之居、猶洛之數、又還相」(327頁下段)とあるのは「奥之數」の誤記で、「甲斐に住み、猶も奥州に數年、又相模に還る」と言っている。

法心禪師は前記史料では松嶋で遺偈「來時明々、去時明々。此是「即」は訛字」何物。喝」を唱えたことになっている。洞内や真壁への行脚は出てこない。あつても一時暫暇してのことであつたらう。法心の没後、蘭溪は壽福寺の大歌了心が紹介した留守氏を頼つて松島に行き、第二世とされるに至つた様である。

留守氏について

それでは實堂和尚が瑞巖寺塔頭の圓同庵に居住して妙心寺派延福寺の嚆矢とされるのは、誰の開基に成るのか。当時の宮城郡主の留守一族に伊達家から迎えられた養子・政景である。伊達家の政策で「一門」となつてからは一ノ関に移り、大安寺を建て、養父の菩提を弔つた。そもそも法心の延福寺初住の背景も当時の留守家広であつたと私は見ると北条時頼伝説は謡曲「鉢の木」でも有名だが、全国行脚は伝説である。最初の留守氏は伊澤家景が幕府(執権・北条義時)によつて奥州留守職に任ぜられた時である。京都で九条家の仕事をしていた伊澤氏を北条時政が招いたという。妙心寺派延福寺の開創も留守政景という壇越の力と見なければならぬが、鎌倉幕府でも北条時頼は間接的にのみ関与していたのである。蘭溪書簡で「壽福老子(大歌)は力めて(宮城?)郡主に稟めて名山の主とするを請う」とある。宮城郡主の留守氏に向けて勧めたのなら、歴史の辻褄が合う。

資料篇

『大覺禪師語録』卷下76頁から。

〔示承性西堂*〕

石含瑚璉。非精鑿者安能識知。道在己窮。苟外求兮應難辨白。鑑之弗精、瑚璉不現。求之在外、道何以明。要體道之本源、非一朝一夕事。求之不憚、探之既深。力到功圓、自然發露。如良匠琢玉。磨兮礱兮、終成大器。

性兄西堂曩入宋朝、參扣知識、蘊藉非淺。和氣逼人。既歸國之後、壽福老子力稟郡主請主名山。彼時只欲効古以折脚鐘子於深山幽谷、養道過時。無奈霜露稊熟、出以為人。將葺六年、急流勇退。繼臨巨福、道聚數年。千百指人如無人相似。上欣下悅、不盡褒辭。既從西過東、心目相照。屈煩首衆、內外恬然。誠所謂會萬殊於一致。消百慮於片時。凡所為人、了無隱昧。更在高養藏器待時。共整未運頹綱。庶使愚懷有望。至祝。」(『大日本佛教全書』95、同刊行會、明治45年)

*「西堂」は法階で、法心が壽福寺西堂寮に住していたから。「承性」は「性西」の訛形、「示」は宛て先を示す。虎関師鍊『元亨釋書』卷六「釋道隆」103-104頁から。

〔(前略) 徒屬中有流言者、因此爲甲州之行。北地之胥吏氓黎、幸隆之竄謫。隆亦曰、我爲法跨海入此國。(中略) 是我弘道之素也。(後略)〕(吉川弘文館『國史大系』第三十一卷、平成十二年)

*「北地之胥吏氓黎」云々は「宮城の郡吏や庶民は道隆和尚の誹謗されるを幸いとした」という意味。「日本布教の為には災い転じて福と成るだ」という蘭溪の述懐は有名。

木村俊彦編集『虎哉録—斑寅集—』60-61頁から。

〔松島記*〕

夫松島者日本第一之佳境也。四圍皆山也。山間皆海也。水光激艷而疑是太湖三万六千頃。山色清淨者、望則波心七十二峯。青海中數百島嶼、山畔許多之人家、奇石怪松茂林脩竹其風景也。可愛可樂。寔天下之靈地也。

昔者本朝相模平將軍時頼創圓福之大道場於此地而拜請法身和尚、以為開山祖師。蓋和尚者遙航入宋朝而統得徑山無準和尚

之宗風而歸本朝矣。輝騰古今之名衲也。雖然与磨年代深遠而佛宇僧戶盡廢壞矣。入眼荒榛破礎頽垣而已。今也本州之太守(藤原)山陰中納言後裔・伊達少將藤原朝臣政宗、自從紀州熊野山取其材木而改圓福之廢禪刹、嘗瑞巖之大伽藍、堅請吾派尊宿海晏和尚住持本寺、專祈國泰民安者也。伏惟藤原政宗公五家柱礎。法社金湯殺活臨時。排陣則提高祖三尺劍、功名蓋世。治國則用趙普半部論。所冀歸扶桑六十州於掌中、保大椿八千歲於身裏。

慶長十有五歲上章闡茂猛陔月立春日、釈氏六十八世再住妙心現覺範虎哉宗乙老衲記焉」
*語録の表題で、瑞巖寺本堂に懸っている額は無題である。

付論―夢窓疎石と松島

『天龍開山夢窓正覺心宗普濟禪師年譜』(春屋編)に依れば、無隱(建仁寺)、無本(興国寺)、一山(建長寺)に師事した夢窓疎石は、正安二年(1300)二十五歳の時に出羽から陸奥に廻り、松島の延福寺に止宿したという。そして近傍の寺で天台止観を聞いたという。その天台の講師の更に師匠は天祐思順と言ひ、真観坊と言ふ天台僧から改宗して南宋の大慧宗杲の孫弟子の法を継いだ人であるという。

この辺りは玉村竹二『夢窓国師』(平楽寺書店1958)の第4節に依るが、「天台講経」は誤まりで、春屋編『夢窓国師年譜』(天龍寺昭和十年刊)の正安二年(1300)の項は「天台止観」と述べる。「師二十六歳。秋出巨福(建長寺)、訪旧識於羽州。途中聞彼訃、止息于奥州松島寺。去寺不遠有法師。乃草河真観上人門弟也。講天台止観。」

天台宗から禅宗への流れにある時代であるが、夢窓が延福寺に止宿したのは蘭溪が去った二十年近く後のことであり、近傍の寺というのも塔頭であったかも知れない。夢窓も止宿できる無隱の寺であったことが理解される。村山泰応『瑞巖寺誌』に依れば五世無隱の時であるが、なんとこの人は夢窓の最初の師・無隱圓範であるので、後者は鎌倉幕府に推されて建仁寺からきたとみななければならない。彼は蘭溪の弟子で一三〇〇年のことである。法心も『法華玄義』を講じたというから、天台教学も兼修するような時代であった。時代が下って花園法皇も、禅を最高の行としながら『法華品釋』や『七箇法門』を

残している。尚、花園天皇は『宸記』で夢窓を、禅僧ではなく教僧であるとし、「此の如き問答は未だ教綱を出ず、達磨の一宗地を掃ひて尽く。悲しむべし」¹⁾としている。(村田正志訳『和譯花園天皇宸記第三』(平成十五年楊岐寺発行)121頁)

この後、夢窓は那須の雲巖寺に止宿して(高峰は鎌倉の淨妙寺に移っていた)、維那として観音懺法を行じた。観音菩薩を勧請して懺悔する観音懺法は禅宗に取り入れられている。法心が帰朝後、『法華玄義』を講じたと言う(無住)のも禅・天台兼修の風があつたからであろう。尚、初出の東海派(悟溪派)三人のうち、實堂は玉浦系大圭の法嗣で、天縱系の虎哉・大蟲とは別派だつたから、『斑寅集』では實堂と虎哉は初会としている。

付記 水沢の大安寺さんのほか、鈴木常光『真壁平四郎』(筑波書林2002)及び楊岐寺発行の花園天皇関係の資料を賜わつた真壁道鑑師と村山泰応『瑞巖寺誌』を頂いた天麟院の村山秀九師に篤く御礼申し上げます。尚、年譜の付いた『夢窓國師語録』三卷(昭和十年天龍寺)は京都大学文学部図書館の田辺文庫のものを閲覧しました。

瑞巖寺の「當山佳持歴代過去牒」に拠れば、實堂和尚は九十三世、石門和尚が九十四世、法身禅師が一世、蘭溪和尚が二世である。瑞巖寺宝物館の御世話になりました。

A Study in The Early History of Zuiganji Templer

Shungen KIMURA

Zuiganji, originally Empukuji, temple is situated in front of the Matsushima bay of Miyagi prefecture since 1259 as a Zen Monastery opened by Zen Master Hosshin in the Kamakura period. Again in 1561 Zen Master Jitsudō was invited to this temple by the feudal lord Rusu from Mino district (now Gifu prefecture) and opened the Myōshihji sect in Mutsu district (now Miyagi prefecture). Before then Tendai Religion handed down Empukuji temple. But from Kamakura period Zen religion was transmitted from China and patronized especially by rulers, that is, the Kamakura government and Kyōto dynasty.

We guess the patrons of both Hosshin and Jitsudō to be Rusu Iyehiro and Rusu Masakage respectively. The latter removed to Ichinoseki, a little northern town of Miyagi district and invited his Master Jitsudō again to the Daianji temple. The latter died two years later. Zuiganji temple was succeeded by his disciple Sekimon. But the latter also succeeded to his Master's temple Daianji, lastly to the Shōjuji temple at Morioka city

Later two Masters of the Zuiganji temple, Yōgan and Kaian, were appointed by his master Kosai of the Kakubanji temple in Sendai city opened by the lord Date Masamune. He patronized Zen master Kosai as his teacher and the renewed Zuiganji temple. Rusu family became a branch of the Date family in Edo period and furthermore was removed to a little northern town, Mizusawa, together with the Daianji temple. The original Zuiganji temple nowadays became the center of sightseeing in Miyagi prefecture.

We added the fact of a young Zen monk Soseki (later renowned as Musō) stayed this temple because his master Muin of the Kenninji temple at Kyōto city became the abbot of this temple then. Muin is said to be the fifth Master of Zuiganji at Kamakura period. Namely the temple was attached to the Kenchōji sect at Kamakura period and from Edo period to Myōshinji sect. Nowadays a monastery belongs to the Zuiganji temple as the most northern Zen training center.